鴻臚館跡 9
— 平成 9 年度発掘調査概要報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第586集

1998
福岡市教育委員会
鴻臚館跡9
平成9年度発掘調査概要報告

平成10年
福岡市教育委員会
(1) 潟湖湖畔周辺観（南から）

(2) 境内跡整備地全景（北東から）
(1) 第1区全景（西から）

(2) 第2区全景（南から）

(3) 第3区全景（南から）
序

鴨鴨館跡の発掘調査は、昭和52年末、福岡市中央区の旧史跡，鴨鴨城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、昭和58年から本格的に開始されました。

本市では、鴨鴨館跡の全面解明を目的として、昭和63年度に鴨鴨館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を現在推進しております。

本書は、平成9年度に実施した鴨鴨館跡前城の遺構確認を目的とする発掘調査の概要報告書です。本報告書が埋蔵文化財への御理解と御認識の一助となれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の完成にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた大蔵省福岡財務局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴨鴨館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育委員会の皆様方には深く感謝する謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊
例 言

1 本書は、平成 9 年度に実施した鴻臈塚墓葬地調査概要報告書である。
2 本書で用いた地図は、Fig.1 に国土地理院発行五万分の 1 地形図
   （NO52-10-11/福岡1号）福岡を、Fig.2 に福岡市都市計画図、NO 60・61・71・72を使用した。
3 本書で用いた方位は、平面直角座標系第 II 座標系方位である。磁方位は東偏 6° 40 でである。
4 遺構は通し番号をつけた後、遺構性格を表記したアルファベットを
   番号の前に付した。
   様例：築：SA○○、井戸：SE○○、道：SF○○、
   建物：SB○○、壷・池：SG○○、柱穴：SP○○、
   槽状遺構：SD○○、性格不明の土壇・堅穴：SK○○またはSX○○
5 本書の執筆・編集は田中寿夫が担当した。
6 編集に際しては、整理調査員 宮園豊志・中野敏（関西博物館・京都）、
   整理作業員 寺村チカ子、高山玲子、塚本惠、金石邦子（遺物分類整理）
   の補助を受けた。
本文目次

第1章 序説 ................................. 1
  1. 洪積類形成 .................................. 1
  2. 既往の調査 .................................. 3
  3. 平成9年度調査事業概要 ...................... 6
第2章 調査の記録 .............................. 7
  1. 調査概要 .................................. 7
  2. 第1区の調査 ................................ 8
  3. 第2区の調査 ................................ 18
  4. 第3区の調査 ................................ 21
第3章 結語 .................................. 26
  1. 平成9年度調査のまとめ ...................... 26
  2. B群遺構の平面構成 ......................... 27

插図目次

Fig.1 洪積類形成概図 (1/50000) .......................... 2
Fig.2 福岡城跡内発掘調査箇所図 (1/5000) .................. 4
Fig.3 指導委員会調査図 (1/500) ........................... 6
Fig.4 城壁発掘位置図 (1/500) ............................ 6
Fig.5 平成9年度調査区位置図 (1/3000) .................... 7
Fig.6 第1・2区配置図 (1/300) ......................... 8
Fig.7 平成9年度発掘調査区位置図 (1/500) ................. 8
Fig.8 第1区配置平面図 (1/80) .......................... 9
Fig.9 第1区土層断面図 (1/80) ........................ 10
Fig.10 第1区出土遺物実測図 1 (1/3) ................... 13
Fig.11 第1区出土遺物実測図 2 (1/3・1/4) .............. 15
Fig.12 第1区出土遺物実測図 3 (1/3・1/4) .............. 17
Fig.13 第2区配置平面および土層断面図 (1/80) .......... 19
Fig.14 第2区出土遺物実測図 (1/3・1/4) .............. 20
Fig.15 第3区配置図 (1/200) .......................... 23
Fig.16 第3区配置平面および土層断面図 (1/100) ........ 24
Fig.17 第3区出土遺物実測図 (1/3・1/4) .............. 25
Fig.18 福岡城跡南側土塁部分遺構関連図 ........... 27
Fig.19 B群遺構平面図 ............................. 27
図版目次

巻頭図版1 (1) 鴻雄館跡周辺景観（南から）
(2) 鴻雄館跡整備地全景（東京から）
巻頭図版2 (1) 第1区全景（西から）
(2) 第2区全景（南から）
(3) 第3区全景（南から）
PL 1 (1) 第1区調査前現状（南から）
(2) 第1区調査終了後全景（南から）
(3) 第1区調査終了後全景（西から）
PL 2 (1) 第1区SD901検出状況（東から）
(2) 第1区S904およびSD901検出状況（南から）
(3) 第1区SD901検出状況（南西から）
(4) 第1区S904検出状況（南から）
(5) 第1区S904土層断面（南西から）
PL 3 (1) 第2区調査前現状（南から）
(2) 第2区調査終了後全景（南から）
(3) 第2区北側トレント掘削状況（北から）
(4) 第2区作業風景（南から）
PL 4 (1) 第3区調査前現状（北西から）
(2) 第3区調査終了後全景（南から）
(3) 第3区掘り下げ状況（東東から）
(4) 第3区北側壁土壌断面（南から）
(5) 第3区南部赤褐色粘質土壌上部S908検出状況（南から）
PL 5 (1) 第3区西壁、S908土層堆積状況（南東から）
(2) 第3区S908検出状況（東から）
(3) 第3区S908内作業風景（南から）
PL 6 第1区出土遺物1 (1/3)
PL 7 第1区出土遺物2 (1/3)
PL 8 第1・2区出土遺物 (1/3)
PL 9 第2・3区出土遺物 (1/3)
PL 10 第1〜3区出土遺物 (1/3)

表目次

Tab.1 鴻雄館跡調査中期計画表 1
Tab.2 福岡城跡調査一覧 3
Tab.3 第1区検出遺構一覧 11
Tab.4 B群遺構（東門・屏）各部座標値および計測表 28
第1章 序 説

1. 調査計画

鴨淵遺跡の発掘調査は、昭和63年度の平和台野球場外野席における掘削遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴨淵遺跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は下表の「鴨淵遺跡調査計画」の下で実施している。

中期計画は、鴨淵遺跡の地域が国立公園福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址復活構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら確定し、平成5年度第2回指導委員会で丁寧を受けた。Table 1 にその要とした。

第I期調査は平和台野球場外野席部分を対象に、昭和63年度～平成4年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの遺物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴨淵遺跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、5年度から7年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

第Ⅱ期調査は、5年度と6年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西郭部における鴨淵遺跡調査及遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西郭城における築城当時の地図の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、平和台野球場部分の発掘調査が可能となる時期の調査である。6年度はこの第Ⅲ期調査の3年次にあたる。なお、9年4月に、同年11月末日をもって野球場を縮小し、平成10年度中に解体撤去の方針が本部局から示された。これを受けて、教育委員会では、鴨淵遺跡調査研究指導委員会下に、平成10年度に解体工事に伴う立会調査と試掘調査を実施することとし、それまでの中期計画の一部を変更した。したがって、第Ⅲ期調査の計画期間は10年度までとなった。

第Ⅳ・Ⅴ期調査は平和台野球場部分の調査で、野球場撤去後の本格的調査を行うもので、その期間は、平成11年度～19年度までの10年を費やしている。またこれに伴って、調査終了後の整備に向けて、基本構想から実施設計までの立案・整備施工を行う予定である。

第Ⅵ期調査は、鴨淵遺跡の全容解明にとって必要と思われる地点について調査を行うもので、第Ⅳ期調査以降の成果およびその進捗状況をみながら、調査地点等は検討して行う予定である。

Table 1 鴨淵遺跡調査計画

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年</th>
<th>対象地区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>開始調査</td>
<td>平成台野球場外野席</td>
</tr>
<tr>
<td>第Ⅰ期調査</td>
<td>4月</td>
</tr>
<tr>
<td>第Ⅱ期調査</td>
<td>6年</td>
</tr>
<tr>
<td>第Ⅲ期調査</td>
<td>7年</td>
</tr>
<tr>
<td>第Ⅳ期調査</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>第Ⅴ期調査</td>
<td>9年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

備考：調査計画の変更は実施設計及び整備施工を行う予定である。
第1章 序説

Fig. 1 鳴讃毎邦と周辺遺跡分布図（1/50000）
2. 既往の調査

福間町通の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成9年度末までに42次にわたる調査が実施されている。そのうち鶴亀跡発掘調査事業として実施されたのは14次20地点である。Tab.2にその内訳を示した。なお文献番号は参考文献一覧に対応する。なお、本年度の調査は福間町通関係第39次調査にあたり、鶴亀跡関連調査では第14次調査となる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>項目</th>
<th>業績</th>
<th>調査項目</th>
<th>調査期間</th>
<th>調査担当者</th>
<th>文献番号</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.1</td>
<td>A</td>
<td>三の丸中央部</td>
<td>史跡内</td>
<td>テクスト</td>
<td>51806000</td>
<td>1-7-11</td>
<td>鶴亀跡1次</td>
</tr>
<tr>
<td>1.2</td>
<td>B</td>
<td>史跡内</td>
<td>東側</td>
<td></td>
<td>5900626</td>
<td>500702</td>
<td>文献番号</td>
</tr>
<tr>
<td>1.3</td>
<td>C</td>
<td>301</td>
<td>三の丸東部</td>
<td>裁判所建設</td>
<td>631007</td>
<td>631105</td>
<td>鶴亀跡2次</td>
</tr>
<tr>
<td>1.4</td>
<td>D</td>
<td>史跡内</td>
<td>地下鉄建設</td>
<td>14300</td>
<td>761201</td>
<td>771008</td>
<td>鶴亀跡2次</td>
</tr>
<tr>
<td>1.5</td>
<td>E</td>
<td>史跡内</td>
<td>地下鉄建設</td>
<td>50000</td>
<td>790172</td>
<td>790117</td>
<td>鶴亀跡2次</td>
</tr>
<tr>
<td>1.6</td>
<td>F</td>
<td>834</td>
<td>赤坂門内側</td>
<td>ビル建設</td>
<td>820347</td>
<td>820352</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
</tr>
<tr>
<td>1.7</td>
<td>G</td>
<td>史跡内</td>
<td>東側</td>
<td>橋梁建設</td>
<td>840120</td>
<td>840122</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
</tr>
<tr>
<td>1.8</td>
<td>H</td>
<td>史跡内</td>
<td>宿舎建物</td>
<td>857000</td>
<td>857000</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.9</td>
<td>I</td>
<td>302</td>
<td>三の丸東部</td>
<td>駅前建設</td>
<td>871225</td>
<td>880120</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
</tr>
<tr>
<td>1.10</td>
<td>J</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>880730</td>
<td>881210</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.11</td>
<td>K</td>
<td>史跡内</td>
<td>ビル建設</td>
<td>881017</td>
<td>881126</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.12</td>
<td>L</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>890420</td>
<td>891207</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.13</td>
<td>M</td>
<td>史跡内</td>
<td>宿舎建物</td>
<td>891011</td>
<td>891021</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.14</td>
<td>N</td>
<td>史跡内</td>
<td>宿舎建物</td>
<td>900930</td>
<td>901230</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.15</td>
<td>O</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>903530</td>
<td>903530</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.16</td>
<td>P</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>910500</td>
<td>910530</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.17</td>
<td>Q</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>920349</td>
<td>920349</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.18</td>
<td>R</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>930900</td>
<td>930930</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.19</td>
<td>S</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>940340</td>
<td>940340</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.20</td>
<td>T</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>951110</td>
<td>951140</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.21</td>
<td>U</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>960200</td>
<td>960200</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.22</td>
<td>V</td>
<td>史跡内</td>
<td>公園整備</td>
<td>970210</td>
<td>970210</td>
<td>鶴亀跡6次</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

凡例
- 史跡名前には本文報告区分
- 史跡種類、史跡指定等の実態調査に伴う調査
- 公園整備、自炊整備等の実態調査に伴う調査
- 調査報告、福間町通・鶴亀跡の調査
- 工事名の調査、跡地に伴う整地調査

3
Fig. 2 福岡城跡内発掘調査位置図 (1/50000)(番号は福岡城跡内調査次第)
2. 既往の調査

【調査報告書・文献一覧】

1. 高野固亮 『平和台の考古史料』 1972
2. 福岡市教育委員会 『史跡福岡城発掘調査概報』 福岡市文化財調査報告第34集 1984
3. 福岡市教育委員会 『築城の研究』 福岡市文教調査報告第59集 1980
4. 福岡市教育委員会 『福岡城跡－内堀内壁石積の調査－』 福岡市文教調査報告第101集 1983
5. 池崎篤・森本信子『福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション』 福岡市文教調査報告第101集所収 1983
6. 弓場信陸 『出土美術館の高野コレクション』 福岡市文教調査報告第101集所収 1983
7. 九州大学考古学研究室『九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物』 福岡市文教調査報告第101集所収 1983
8. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城三ノ丸御殿屋敷図編』 福岡市文教調査報告第59集 1990
9. 福岡市教育委員会 『福岡城前壇』 福岡市文教調査報告第131集 1986
10. 福岡市教育委員会 『福岡城跡・Ⅳ－内堀内壁の調査－』 福岡市文教調査報告第237集 1991
11. 福岡市教育委員会 『福岡城跡Ⅰ－発掘調査概報』 福岡市文教調査報告第270集 1991
12. 福岡市教育委員会 『福岡城前池第3次調査報告』 福岡市文教調査報告第239集 1992
13. 福岡市教育委員会 『福岡城前池第4次調査報告』 福岡市文教調査報告第294集 1992
14. 福岡市教育委員会 『福岡城跡Ⅱ』 福岡市文教調査報告第315集 1992
15. 福岡市教育委員会 『月見櫓』 福岡市文教調査報告第316集 1992
16. 福岡市教育委員会 『福岡城跡Ⅲ』 福岡市文教調査報告第355集 1993
17. 福岡市教育委員会 『福岡城跡Ⅳ－平成4年度発掘調査概要報告』 福岡市文教調査報告第372集 1994
18. 福岡市教育委員会 『福岡城跡第23次調査報告』 福岡市文教調査報告第415集 1995
19. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第4次調査報告』 福岡市文教調査報告第416集 1995
20. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第463集 1996
21. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第23次調査報告』 福岡市文教調査報告第486集 1996
22. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第486集 1996
23. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第498集 1997
24. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第498集 1997
25. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第498集 1997
26. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第545集 1997
27. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第546集 1997
28. 福岡市教育委員会 『築城前福岡城跡第25次調査報告』 福岡市文教調査報告第586集 1998

(福岡市文教調査報告は、福岡市文化財調査報告書の略)
3. 平成9年度調査事業概要

（1）発掘調査の組織
1）調査および整備指導

**鴻樫館跡調査研究指導委員会（第5期2年度）**

委員長：九州大学名誉教授 横山浩一 考古学
委員：事務局総務部鴻樫館研究催課長 坪井清足 考古学
奈良国立文化財研究所 田中琢 考古学
福岡大学教授 小田富雄 考古学
山口大学名誉教授 八木光 国史学
岡山大学教授 野野久 国史学
前奈良国立文化財研究所 鈴木嘉吉 建築史学
九州芸術工科大学教授 杉本正美 造園学
京都大学名誉教授 中村一 造園学

2）発掘調査・整備事業主体

調査主体
福岡市教育委員会教育長
文化財部長
調査統括
文化財整備課長
文化財部課長（史跡整備等担当）
庶務担当
管理係長
管理係
調査・整備担当
文化財整備課主査
整理調査員

（2）調査事業の概要

1）鴻樫館跡調査研究指導委員会 平成9年12月3日と4日に実施。平成9年度調査中間報告とその検討、および平和台野球場解体工事に伴う調査、11年度以降の長期調査計画の検討を行った。

2）鴻樫館跡発掘調査 平和台野球場南東部の鴻樫館跡関連遺構の有無確認と範囲確認を目的として、3地点について調査を実施した。調査期間は平成9年8月18日から10月16日迄である。

3）ボーリング地質調査 平和台野球場グランドおよびその周辺における旧地形復元を目的として6地点について、平成10年1月31日から2月6日に実施。平和台野球場跡と高架築造に浅い谷が深く掘り入れられていることが確認できた。

4）公開事業 鴻樫館跡展示館「博物館情報」コーナーに、福岡市およびその周辺の博物館・資料館紹介のためのパネルを製作展示した。

また、展示説明会を兼ねて、演奏会「ギターによる鴻樫館幻想」を平成9年5月23日に実施。92人参加。
第2章 調査の記録

1. 調査概要

(1) 調査の目的

年度の調査は、平成7年度から実施している鶴亀戸跡第III期調査の3年目である。調査は、平和台野球場外周南側に位置する福岡城跡土塁下部における、鶴亀戸跡関連遺構の有無および範囲確認を目的として実施した。

(2) 調査区の設定

調査区は3地点設定し、設定順に北から第1区〜第3区と呼称した。第1区・第2区は奈良時代の東門(SE300)前面における遺構の有無確認のために東門の東西中軸線の東西延長に設定した(Fig.6)。第3区は、平成2〜3年度の調査によって確認された推定南門基壇の南北中軸線を基準として、平安時代の礫石建物SB31を東側へ対称に折り返した地点の東西延長に設定した(Fig.7)。

(3) 調査結果の概要

第1区では、江戸時代の土塁状の高まり(SE904)、明治期以降の石組溝または暗渠(SE801)、それぞれ一部残して掘削された戦前または戦後の削り取れた礫(XX602)や廃棄物土壌等を確認した。第2区では、福岡城跡土塁下に少なくとも4m以上堆積していることが確認された。調査面積が狭いこともあり、平安期の遺構面には達することができなかった。第3区では、約4.5m以上の厚さの福岡城跡土塁下部で、奈良時代に造成された赤褐色粘質土壌を確認した。奈良〜平安期の遺構は福岡城築城時またはそれ以前に削平されており、確認できなかった。遺物は各区とも、土塁下に古代瓦破片が大量に出土しているほか、須恵器、唐・宋末期および南宋期の白磁、青磁、元〜明初の青磁近世および近現代の焼造貨・露天焼や肥前系釉磁器等が出土した。

Fig.5 平成9年度調査区位置図 (1/5000)
2. 第1区の調査

(1) 調査区の位置（Fig. 5～7、PL. 1）

当該区は、平成3年～4年度にかけて確認された奈良時代の門跡（SB300）の南北中央線から東側へ約38～42mの地点に位置している。この地点は、福岡城跡土壌の外壁斜面に位置しており、現況地表面の標高は4.3m、箇所検出面は3.3m前後を測る。SB300の検出面は標高8.7～8.3mであるので、検出面の相対の高差は約5mである。なお調査面積は71m²である。

(2) 上層堆積状況（Fig. 9、PL. 1・2）

当該区の土層は、大きく8層に分けられる。第1層（黒灰色腐植土）1-2層（褐色～褐色粘質土）は現代の表土および盛土であり、平和台野球場建築の際の周辺整備に伴い造成されたもので、それ以降の再整備等によるものである。第2層（黑色腐植土）は明治期以降から戦前の地表土である。第3層（褐色粘質土）は、調査区を南北に断面して掘削された（SX902）を覆っている整地層である。石組選材SD901はこの層の下位の第5層上部で検出された。SX902は明治期～昭和前期に掘削されたと考えられることから、第3層の整地時期はそれ以降戦後までのものと考えられる。第4層はSX902の埋土で白色～黄白色風化石灰岩片を多く含む赤褐色粘質土である。第5層はSX904を覆う整地層で、黄白色～白色風化石灰岩を多く含む黄褐色～褐色粘質土である（SX903）。第6層（暗灰色～黒灰色砂質土）は、

![Fig. 5 第1・2区配置図(1/100)](image)
Fig. 7 平成9年度発掘調査区位置図 (1/500)
Fig. 8 第1区遺構平面図（1/80）（A～Hは断面線）
Fig. 9 第1区地層断面図（1/80）
土壌状の高まりのSX904上面を覆う土層で、江戸時代～幕末・明治期にわたる表土層と考えられる。第2層はSX904を構築する盛土層で褐色の風化石灰岩層を主とする。基底部に近い第7～3層は細かく明褐色花崗岩風化層（真砂層）で、水平に盛っている。現在の潮湿地帯は標高約2mで、真砂土下層に相当する。基底部と考えられる第8層で、風化石灰岩層が主となる褐色粘質土である。その厚さは少なくとも50cm以上と思われる。

(3) 遺構と遺物の概要
検出した遺構と遺物の概要は下記のようになる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>遺構名と推定時期</th>
<th>出土遺物の概要</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>戦後の石垣・土壌 (SX897・898・899・900・905)</td>
<td>古代瓦破片・越州窯系青磁・白磁</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和前期の堅壇 (SX902)</td>
<td>肥前系染付・15世紀代龍泉窯系青磁・唐宋~北宋代白磁および越州窯系青磁</td>
</tr>
<tr>
<td>明治以降の土壌 (SX895)</td>
<td>肥前系陶磁器(生活雑器・茶器仏前具など)・越州窯系青磁・古代瓦(鶴尾館式軒丸・樋目)片</td>
</tr>
<tr>
<td>明治期以降の石畳または暗溝 (SD901)</td>
<td>古代瓦片</td>
</tr>
<tr>
<td>江戸〜明治期以降の盛土層 (SX903)</td>
<td>古代瓦片・奈良期須恵器片・新羅焼片・白磁</td>
</tr>
<tr>
<td>江戸期の土壌状遺構 (SX904)</td>
<td>第6層および第7層から古代瓦片、越州窯系青磁片、龍泉窯系青磁(鎌倉期)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(4) 遺構と遺物考察
以下の説明のうち遺構はすべて近世以降のものである。明らかに昭和前期〜現代のものと判断された遺物については省略した。遺物はいずれも各土層および遺構から二次的な混入の状態で出土した。

1) 第1層 (表土層) 出土遺物 (Fig.10、PL.6)
第1層においては、調査区北側斜面で近世の遺物が検出された状況で多数出土した。近世の破片と古代瓦片を主として、近世の彩絵染付、土師器皿、土人形、瓦質土器（火鉢・火舎など）、中世の陶磁器片のほか、古代の白磁や青磁、須恵器、新羅焼等が若干出土している。

土師器皿 (1-4) 口径7.4〜7.9cm、器高1.2〜1.9cm、底径5.3〜6.9cmを測る。いずれも焼成はあまり良く軟質でもある。色調は明褐色で、胎土には雲母粘片を多く含む。底部には右回転による系切痕が残る。4の口縁部は炭化物が付着している。江戸期のものである。

焼塩壺 (5) 口径7.6cm、器高1.7cm。焼成は比較的よく焼きまきている。外面はナデ仕上げで、内部には目立たない黒目圧痕が残っている。

土人形 (6) 二つの米俵の上に立つ大黒像を想う人形である。高さ3.5cm、幅2.1cm、厚さ1.7cm。胎土はきめ細かな湿土で、焼成はややあまよい軟質である。側面には型の合わせ目が残る。

染付中皿 (7) 口径13.9cm、器高3.7cm、高台径6.45cm。内面には緑彩・花文を大きくあらわし、深い緑色の変更で施錦している。外面裏文様は折枝梅文または梅花連続文をあらわしている。高台は蛇の目高台で露胎。

陶器器棺 (8) 口径12.7cm、器高4.9cm、高台径4.5cm。回転ヘラケザリ体部下部から高台は削り
だしている。体部下部と高台以外に軸薬を厚くかけている。軸薬は黄白色で細かな水鉱が表面全体にみられる。内底見返には鉄灰でデフォルメした帆船を一気に描いている。

磁器製分銅（15）高さ9.3cm、幅6.2cm、厚さ4.3cm、重さ420g。底部以外に透明釉が厚くかかる。
正面には商名名取為銅重しの表示が、また裏面には重しの調整を図るための孔の跡が残る。

陶磁器製（16）口縁部は平方に上方に聞き、表面には穏やかを有する。底部は目玉8条から10条が一単位で、底部から口縁に向かって反時計回りに施されている。堅く焼きしめる。

龍泉窯系青磁瓶（11）内部にへら片切口による形を来している。胎土精良。焼成堅調。釉色は薄い黄色で、細かな水鉱が全体的にみられる。

新龍鳴長頸壺（9・10）9、10は頸部径4.8cm。頸部中央に二条の線流、頸部と体部の境に断面三角形の突起を有する。型部には直径0.4cmほどの押圧竹帘文を施している。10も外面に押圧竹帘文を施す。いずれも焼成良好で堅く焼きしめる。灰色を呈する。なお胎土表面の色彩は暗緑赤色。

白磁瓶（12・20）12は口縁部破片で口径15.6cm。20は台高部破片で、台高高0.5cm、台高径5.9cm。いずれも小土層の口縁部を有する白磁である。胎土は白色で精練。釉薬はうすい乳白色がかった透明釉で、釉上がありは良好である。20は蛇目台高で呈付部は施釉後、焼ききっている。

越州窯系青磁瓶（13・14・17・19・21）いずれも底部破片である。胎土は精良で、焼成が壊れで釉上がありは良好な精製品（13・21）と、鉄分の吹き出しが多く見られ、焼成温度が低いために、釉上ありが少しで釉色が黄灰灰色の粗製品（14・17・19・21）がある。転台方式のものと、やや下げ底気味の平台のものがあるが、前者は精製品で後者は粗製品が多い。

2）第2層出土遺物（Fg.10・11・PL.6・7）

第2層では、調査区中央から北側、特にSX896周辺で多数の18～19世紀の肥前系陶磁器がまとまって出土した。

土器瓦礫（22・24）口径7.1～7.8cm、器高1.1～1.4cm、底径5.4～6.4cm。いずれも焼成はあまり軟質でもない。色調は褐色一明褐色で、胎土には雲母細片・石英砂を多く含む。右図の半切りで盛り。

土製ブミ общественно製（25）器高1.6cm、底径2.9cm、底径2.6cm。手捏によるものので、屑部からやや下がった位置に径0.6cmの孔がある。

土器瓦（26）径約4.2cm、幅3.0cm、厚さ1.8cm。胎土はさき細かな混薬土で、焼成はややあまく軟質である。底部から口縁に向かって棒に刺すための穴が打たれている。

染付青磁瓶（29）口径7.1cm、器高6.2cm、脚部底径4.0cm。口縁部外側には染花文をあしらっている。萬須色は淡い藍色。底部は回転へラケズリー、露治である。

青磁染付（31・38）器高38cmとセットとなるもので口径10.2cm、器高3.2cm。38は口径11.3cm、器高6.8cm、高台径4.6cm。いずれも外面に青い強い釉薬をかけ、口縁部外側には草花の連続文を、内底には花弁、高台内には「福」字で飾りが暗青色の虫須を描かれている。

白磁錦（27）口径4.9cm、器高2.6cm、底径4.1cm。型造りによると思われる。底部は露治で全体に透明釉を薄くかけ、釉上がありは良好である。

染付窯（32）口径7.5cm、器高3.8cm、高台径3.0cm。わずかに青いがかかる体部外面に、牡丹文を一対あしらっている。萬須色は淡い黄色。高台白付には灰色が付着している。

白磁輪花瓶（28）口径17.3cm、器高6.2cm、高台径8.8cm。体部下半分から高台部は回転へラケズリーによる。口縁部は六輪花で、体部外面には押圧生まれ前に花弁を象っている。内面には花文を施文。文様は不詳である。文様は2種類で、交互に各々3面施している。

漆付小皿（35）口径10.1cm、器高2.0cm、高台径6.4cm。内底には型紙裁りによる竹文が描かれている。高台は蛇目台高で、露治。

染付窯（30・33・34・37）30・34は慶州焼の器形のもので、高台がやや高く、体部は高台から直線的に開く。30の内底には文様が、34には花文が描かれている。34は口径12.0cm、器高6.5cm、高台径7.4cm。33は釉が渋い赤褐色の口縁を施した熱で、松文を体部外面に一対描いている。口径11.2cm、器高5.7cm、高台径5.0cm。歯状に焼かれた37は扇型の熱で、牡丹文を体部中央に大きく配している。口縁端部は露治である。口径9.8cm、器高8.2cm、高台径7.0cm。
Fig.10 第1区出土遺物実測図1（1/3）
染付大皿（39）口径33.1cm、高16.5cm、高台径33.1cm。内底に獅子文を、体部内面には牡丹文と流水文を大きく配し、外側裏文は梅花文を巡らす。高台内には銘が記されている。銘文は不明。いずれも深い暗色系の光具色である。

染付水差（40）現存長9.1cm、幅5.5cm、厚さ3.2cm。裂き起こしによるもので、内面にはやや目立つ僅かな凹凸痕が残る。文様は松文を中央に配し、周縁に沿って青海波がくすれた渦文を連ね、ややすんだ褐色釉を施釉。

青磁瓶（45）口径11.3cm、器高7.8cm、高台径4.6cm。やや発色の悪化半透明の青緑色の釉薬が全体にかかっている。内面にはへら揺ぎによる草花文、外側には波文を描く。強く反する口縁上端部には弱い焼成記がある。胎土は褐色。

陶器器（36・42）36は高台がやや高めで腰の深い焼である。高台径5.4cm。全面施釉後に高台を付けて揺さ取っている。釉色は薄く黄白色がかわり、細かな水剝が入る。胎土は白色で良く焼成している。42は口径8.4cm、器高5.5cm、高台径4.1cm。内外面ともに白釉を刷毛で施釉する。器壁は薄く焼成堅固。胎土は白褐色。

陶器器（43）体部がやや内傾する筒型の水差である。口径11.7cm、器高10.6cm、高台径7.4cm。褐色釉を窯内施釉後、白釉を刷毛で波文に施釉する。口縁内部と端部は釉薬を塗り尽くし、外側付には目を残す。

陶器火照皿（41）口径5.6cm、器高2.8cm、底径5.3cm。上皿内面には暗黃褐色の不透明釉を薄く施釉。下皿の口縁内側で体部外側は露胎。口縁端部と底部には無焼成の痕跡が残る。

陶器（44・47）44口径7.7cm、器高7.9cm、底径6.9cm。底部最大径9.5cm、底径7.2cm。色が薄い類部を有し、帯はやや張っている。底部はわずかに内壁ながら窯内的に大きめの底部へ続く。底部は左回転の水切りとし、胎土は長石・石英砂を含む。暗赤褐色で焼成良好。釉色は暗褐色で体部下半から上半に施釉する。47口径18.8cm、中型の皿である。筒じまった短い類部を有す。胎土および器面は暗褐色で、表面には薄く鉄釉がかかった。内面には押きの痕跡が残る。

陶器 선（45）口径12cm、器高22.5cm、高台径12cm、底径8.8cm。器壁は薄手である。全体に薄く褐釉を施釉し、口縁部から体部上半に黒釉を施釉する。体部下半部にはへらに溝の窪みに黒釉を埋めている。胎土は灰色で、良く焼きしている。

陶器線（48・49）48は口縁部が正直状に肥厚するので、暗褐色の釉面を薄く施釉し窯内全体に施釉する。49口径35cm。全体は肥厚しながら釉や釉部を引き出している。口縁外側には断面三角形の突立を施し付けている。釉面は非常に薄く、口縁端部内側から体部上半にかかる。

近世瓦（50・51）40式丸瓦である。長さ26.5cm、最大幅13.9cm、最小幅11.6cm。玉縁の幅8cm、高さ7cm。外面中央に単純に瓦飾器が残っている。51は軒丸瓦片である。瓦当面には、比較的長い尾の三又文を配している。瓦当の直径は14.2cmほどである。焼成はやや悪く、もろい。

3）第3層出土遺物（Fig.11・12、PL.7）
第3層からは古代瓦、末代陶磁製品、越州焼製品、近世瓦、近世土師器（皿）等が二次的な混入の状態で出土した。

陶器白釉瓶（52）口径10.0cm、器高4.9－5.3cm、高台径4.1cm。体部は厚みのある箱形で、口縁部はやや強く内傾する。高台部以外に厚い灰白一白色の釉薬を施釉する。水割がやや顕著。胎土はややきめが粗く暗灰色、良く焼きしきっている。

越州陶器器（53）底部径10.1cm。胎土はきめがやや粗く、黒褐色を帯びず。底部は露胎でやや上げ底気味。内外は灰褐色で目立つ。

4）土塚SX896（Fig.8、PL.2）
調査区北側に位置する。調査区壁にかかっており、全体の1/3ほどを確認した。推定長径約2mの不
Fig.11 第1区出土遺物実測図 2 (1/3・1/4)
第2章 調査の記録

堅な箱円形の土壌である。大量の肥前御陶磁器が出土している。遺物および層位関係から末期明治期初頃のものと思われる。第2層北側やSX900等で出土した遺物の多くは本来この土壌に捨てられたものと思われる。

SX896出土遺物(Fig. 11, PL. 7)

陶器柄(54) 口径10.2cm、器高5.3cm、高台径3.7cm。内外面とも暗茶褐色の釉薬の上に白釉を刷毛先で押し付けながら施釉。外面下端は開口による。胎土は灰褐色で薄く焼きまっている。

楽付器(55~57, 60) 口径7.4~11.1cm、器高5.2~5.9cm、高台径3.1~4.8cmを測る。55には印判による花文、56には舎(fr)文、57には祥文、60には菊文を描きをしている。

染付壷(58, 59) 口径7.1~7.8cm、器高3.6~3.7cm、高台径2.8~3.3cm。58は松文が、59には雨降文が深い青色の鳥を描かれていた。58の高台付下には撚毛が付着してある。59の器壁は薄手で釉上がり良。

越州窯系青磁矢注または鉢(61) 口径8.6cm。内面は露胎、外面には半透明の灰緑色の釉薬がかかる。高台付下には両翅を残す。

5) 石垣SX897(Fig. 8, 9, PL. 2)
現在のフェンスを設ける以前にあった昭和後期の石垣である。

6) 塚塚SX898(Fig. 8, 9, PL. 2)
SD901を切って掘削された廃棄物の長方形の土器で、昭和20年代以降のものである。

7) 塚塚SX899(Fig. 8, 9, PL. 2)
SX900を切って掘削された廃棄物の円形土壌である。昭和20年代のものと思われる。

塚塚SX900出土遺物(Fig. 11)

染付中皿(62) 口径12.0cm、器高3.2cm、高台径8.8cm。口縁部は強く外反する。内面には蝶文を連続して描いている。

8) 塚塚SX900(Fig. 8, 9, PL. 2)
調査区北西の壁にかかって発見された。かなり大型の壁穴で、木炭や焼土多く含む。昭和20年代前半の廃棄物土壌と思われる。

SD901出土遺物(Fig. 12, PL. 7)

陶器柄柄目手染付角皿(63) 現存長13.8cm、器高4.2cm、高台径6.0cm。暗茶褐色の釉薬の上に白釉を波状に刷毛で施し。内面は海青波を描きさらに明るい青色の鳥を描き。胎土は暗赤褐色で、薄く焼きまっている。良品である。

青磁短頸壺(64) 口径6.4cm、器高7.9cm、脂高7.9cm、底径4.5cm。口縁部はほぼ直立する。腹の張りは弱い。底部から腹部下部は露胎。透明灰緑色の釉薬を施す。

9) 石垣遺構SD901(Fig. 8, 9, PL. 1, 2)
第5層上で確認された石垣の模様を模倣する。確認された長さは約5.0m、幅0.5mである。SX902の横断時に発見され、中央から西側は石垣が沿っている。主軸方向はN95°Wで、底板の標高は3m前後である。平成4年度の調査で、西側延長部が確認されている(SD370: Fig. 6)。その北高差は4.4mを測る。構築時期は遅れても末期、または明治期の可能性が高い。

SD901出土遺物(Fig. 12)

越州窯系青磁壺(65) 口径18cm。胎土精良。焼成堅密。緑褐色の釉薬が薄く全体にかかれる。ヘラケズリによって低い輪高台を作り出ししている。内面および高台付下に目詰が残る。

9) 塚塚遺構SX902(Fig. 8, 9, PL. 1, 2)
調査区中央から西側に位置する。掘込の東側壁面は、壁面層SX903を切って、ほぼ垂直に、深さ2.5mほど掘削している。西壁については未確認である。長軸の方向はN18°Wである。壁土は白色、黄色、白色、隠色、黄色、青色、赤色を含む赤褐色粘質土で、第3区SX906と同質である。戦中から戦後のものか。

SX902出土遺物(Fig. 12, PL. 10)

陶器柄(66) 口径4.9cm。やや人ぶりの柄である。黄褐色の半透明釉を全体に薄くかけている。胎土はやや粗く、焼きが非常に弱い。
須恵器杯蓋（67）口径15.7cm、器高2.6cm、つまみ径2.9cm。胎土は白石灰と長石微粒が多く混入している。焼成はやや軟質でもろい。色調は灰色。

軒平瓦（68）瓦當の幅（高さ）3.6cm。中心軸の宝珠を中心として、左右対称に唐草文を配っている。

軒平瓦（69）内把は均正唐草文を配し、外区に内把は半円形の扁平な扁平瓦。下縁には錦織文を配した錦織文軒平瓦である。厚さ4.4cm。焼成はややあまく黒灰色。平瓦の下面は縁目印線が、上面には帯目や帯を残す。側縁はヘラケサリによる調合。

11）第5層（生地層SX103）（Fig.8・9・PL.2）
第5層は上層状遺構SX904を覆う盛土である。黄白色〜白色の風化頁岩、褐色粘質土を主とし、東側から西側にかけて次第に厚くなっている。おそらく、SX904西側の谷地を平坦にし、地表レベルを高めるために造成されたと思われる。造成時期は末〜明治期に当たると思われる。

SX903出土遺物（Fig.12、PL.8）
須恵器杯蓋（71）砥平な宝珠形のつまみを持つ。焼成はややあまくもろい。色調は青灰色。

白磁模（72）口縁端部が外方にへ水平に引き出され、体部底部の口縁部近くには細い子線を巡らす。胎土は細かな黒色粒を含む。釉色は透明な灰白色。

12）土燈状遺構SX904（Fig.8・9・PL.1・2）
調査区東壁側で検出した。ほぼ南北方向に延びている。現在の福岡県土燈とは方向が異なっている。断面は、東側は地形の改変が顕著であるために原状をとどめていないが、逆台形を呈していたものと思われる。第5層の下部の第6層土褐色腐植土層を旧地表土とすると、高さは西側平坦面から約1.7m以上、基盤部幅は6m以上が推定される。土層は調査区中央部で7層に分層できるが、いずれも人為的な世紀。最上層の風化頁岩礫を多く含む黄褐色粘質土上面（標高1.8m）から、中部には、約20cmほどの厚さで花岡岩風化土（真砂土）を用いている。

SX904出土遺物（Fig.12）
上面から龍泉窯系青磁小片、越州窯系青磁、古代瓦（縁目・格子目）片が出土している。

軒丸瓦（70）鴻巣鏡式軒丸瓦で、外区を含むのみの破片である。暗褐色粘質土から出土。

Fig.12 第1区出土遺物実測図3 （1/3・1/4）
3. 第2区の調査

(1) 調査区の位置 (Fig. 6, PL. 3)

当該区は、第1区と同じく、奈良時代の門跡 (SB300) の南北中軸線から東側へ約20mの地点に位置している。この地点は、福岡城跡土塁頂部から内壁斜面上に位置しており、現況地表面の標高は9.7m前後を測る。第1区の現況地表面は4.3mであるので比高差は約5.7mである。調査区は、門跡 (SB300) の東西中軸線に対して調査区を直交させ、前面に取り付くと想定される道路上に遮蔽または溝状遺構の有無と、遺構様面面の遺存状況を確認するために設定した。調査面積は31m²である。

(2) 土層堆積状況 (Fig. 13, PL. 3)

調査区北側では現地表 (標高9.7m) から標高6.3mの面まで掘り下げた時点で、作業の安全性から中斷した。南側では地表土および昭和20年代以降の廃乱土を除去し、土壌盛土上面を確認し調査を終えた。

土壌は土層から、第1-1層20cm前後の地表土、第1-2層昭和20年代以降の廃乱土、第3層土壌盛土（風化頁岩礫を多く含む黄褐色粘土質）の3層に大きく分けられる。土壌盛土は、標高8.0m前後の水平面までが堅くしまており、風化頁岩礫が主となるが、それ以上の面では黄褐色粘土質が主で礫岩は少なくなる軟質である。

(3) 遺構と遺物の各説

福岡城跡土塁に関しては、その構築が、土壌観察の結果、標高8.0mの水平面で盛土層地を終えた後に一気に2m以上の土壌構築を行ったと考えられた。この状況は後述する第3区でもほぼ同様な堆積状況であり、基盤面の構築をある一定のレベル（約8～9m）で積み上げたと考えられる。

掘り下げ作業は標高6.3mまで行ったが、所期の目的であった平安期以前の遺構様面面まで達していない。東門（SB300）側の構築は標高8.3mの前後であり、約20m離れた地点で少なくとも4m以上比高差が、江戸時代初頭の福岡城土塁構築の時点ではすでに存在していたことになる。これは、平安4年度調査時に確認された中世の溝SD244によって深くえぐられたが、福岡城構築前にすでに東門東側前面部分が急傾斜となっていたか、あるいは築城時の造城の結果、削平されたものと考えられる。

遺物は、表現および現代掘乱土層から古代瓦片を主として、近世瓦、漆皮、土器、北条氏白磁、越州窯系青磁、磁等が若干出土している。いずれも二次的な混入品である。土壌盛土からは古代瓦と越州窯系青磁、北条氏白磁片が少量出土している。

1) 表出土質遺物 (Fig. 14, PL. 8-10)

軒丸瓦 (73-74) いずれも三瓦文である。73は瓦片が左転転で、瓦文数は9、74は右転転で瓦文数は12である。瓦片の直径は73が14cm、74が14.1cmである。江戸時代末期以降のものと思われる。

平瓦 (75) 上面に布目状模様、下面に巻口にき裂を残す厚手の平瓦である。厚さ5cm、鶏雛館跡出土の平瓦では最大の部類のものである。瓦上には砂粒を多く含み焼成はややあかび、もろい。側縁はへラケツリによる成形。

瓦簿 (76) 厚さ5.6cm、現存長11.9cm、現存幅10.5cm。瓦はやや粗く、砂粒を多く含む。焼成は悪く、もろい。表面は黒褐色。

白磁焼 (77) 復元口径15.3cm。細い玉縁口縁を有する良質の白磁である。胎土精良、やすい色がかった透明釉を施釉。

越州窯系青磁焼 (78-81) 78は口縁長径片である。口径18.8cm。黄緑釉が薄くかかる。79-81は口縁部片である。79は輪高台で、焼成、釉上上がりとも良好。80は蛇目窯台台状に割り切れたもので、輪付外縁に内底に目跡を残す。81はやや上げ下の平高台で80と同様に目跡を残す。80・81の胎上には細かな黒茶壌がみられる。

2) 土壌盛土出土遺物 (Fig. 14, PL. 9)

越州窯系青磁焼 (82-90) 胎土および釉部の差異から精製品と粗製品の2別に分けられる。精製品は内面に目跡を残すもの (87、88) と残さないもの (85、86) に細分できる。胎土は粗良である。いずれも輪高台。粗製品は82、84、89、90で、黄褐色〜黃緑灰色がかかった透明釉を施釉している。
Fig.13 第2区間斜平面および断面図（1/80）
第2章 調査の記録

輪高台状にケズリ出したもの（82・84）、やや上げ感気味のもの（83・89・90）がある。体部下部から底部は露胎である。胎土は焼成温度が低いためガラス化が進んでおらず、肉眼観察では鉄分の吹き出しと思われる黒色帯を含む。

越州窯系青磁水注（91）底径9cm。胎土はきめ粗く、黒色帯が点在する。釉薬は黄緑灰色で体部上半部にかかる。底部は平底台で中央は上げ底となっている。

白磁碗（92）高台径7cm。薄く黄白色がかかった透明釉を施釉する良質の白磁である。ケズリ出しによって蛇目高台とし、全面釉着後、豊附部は拾き取っている。

軒丸鉢（93）複弁八葉の蓮弁文を配する焼窯箱式瓦である。中房は平坦で蓮弁文帯よりやや低い。焼成はあまく軟質である。黒灰色。

平瓦（94）下面に格子目押き痕および「質」銘を、上面には布目押痕を残す。焼成は良好で堅く焼きした。灰色〜青灰色。

Fig.14 第2区出土遺物実測図（1/3・1/4）
4. 第3区の調査

（1）調査の目的
第1期調査では、江戸時代の家を設けていたと考えられる大規模な遺構は発見されておらず、平成2年度の調査ではその盛土下部から平成時代の推定基壇基壇跡の一部が、平成3年度には奈良時代の基礎遺構の一部が確認された。これらを含め、土塁の下部に築造家から築造家までの各時期の何らかの外郭設置の存在が考えられ、平成8年度に引き続いて土塁東端部における構造の確認を目的として調査を実施した。

（2）調査区の位置（Fig.15, PL, 4）
当該区の設置にあたっては、平成2～3年度の調査によって確認された推定基壇基壇の南北中軸線を基準として、平安時代の築造建物群の一つである建物SB31を対角線に位置する地点の南側延長上、推定軸線（SB50）の中軸線上約30mの位置に設置した。当該地点は土塁の頂部から外壁斜面上を踏む面として、土塁をもとで南北に横断する形となった。現況況面の標高は最頂部で11.4m、土塁外端下部で3.2mを測る。調査面積は101m²である。

（3）土層堆積状況（Fig.16, PL, 4, 5）
第3区の土層は大きく8層に分けられる。上層から第1層昭和盛土、第2層表土（黑色～黒褐色土層）、第3層赤褐色～黄褐色粘質土（SX908残土）、第4層土塁盛土、第5層室町時代～江戸時代初期遺物包含層（灰色砂質土層）、第6層奈良平成～室町時代遺物包含層（黒褐色粘質土）、第7層平成8年度遺物包含層（暗褐色～暗赤褐色粘質土）、第8層赤褐色粘質土（黄色～白色風化層）を含む盛土層）である。

第3層は、堅硬SX908の理土である。4層に細分化できるが、一括して埋め戻された土層である。
第4層は6層に細分化できる。第4-1層赤褐色粘質土、第4-2層黒褐色粘質土、第4-3層黒褐色風化頁状岩屑層、第4-4層黄褐色砂質土、第4-5層暗灰色砂質土・灰色砂質粘土・暗褐色～黄褐色粘質土・風化頁状岩屑の混合土層（奈良時代から室町時代の遺物を含む）である。第4-1層以上の土層は江戸時代の盛土と考えられるが、第4-1層は明治期以降に再構築したと思われる土層である。第4-2層は第4-3層以下と比べると軟質である。第4-3層は風化頁状岩を主成分堅くしており、第2区での調査所見に相違しない（18頁）。第4-4層は細かく砂状を多く含む粘質土で、灰色粘質土や黒褐色粘質土と混入する堅くしまった土層である。第4-5層は調査区北側では第6層に、中央から北側では第8層に、SX908付近では第5層に直接盛土されている。これらの土層間の不整合面をなすが、4-5層を構成する暗灰色砂質土、緑灰色砂質土、暗褐色～黄褐色粘質土はいずれも、本来福岡城の築造以前の堆積土であり、出土遺物からみても土壁内側にあった表土以下の軟質な土壌を削平し、平坦にした土壁直上に突き固めて盛土したものと考えられる。4-5層は、土塁下部端の二次堆積物である。
第5層はこれまでの調査で江戸期の遺構下部や、平安時代の遺構を覆って確認された土層で、石英砂や雲母片を含んでおり、花崗岩風化土（頁岩土）が混入している可能性がある。平成8年度調査では、同様に土塁盛土の基盤層として確認している。当該区では約5cm厚の土層でSX908の北側壁であることが確認された。第5層は平成8年度の調査では第6層直上に覆っていたが、当該調査区北側では第5層上には認められず、またSX908北側では、第5層直上を覆っている。これは、第6層と第7層が削平されたと思われる。
第6層は平成8年度の調査では第5層の下部に位置する遺物包含層で、奈良・平安時代の瓦をはじめとして、鍬倉・室町時代の遺物がわずかに混入している。第6層から第7層、第8層は堆積物のためである。
第7層は本来第8層上に堆積する土層で、腐植土壌化が進み、有機物による污染によって黒いを増したと考えられる。長方形を含む遺物包含層である。
第8層は盛土層である。盛土層により遺物をほとんど含まないために、現在までのところ明
確でないが、平成4年度調査時に確認された造形痕跡にみられた赤褐色粘質土や平成8年度の地山面直上を覆う赤褐色粘質土などと土柵が共通していること、および上部の包含層のあり方からみて奈良時代まで遡る盛土層の可能性が高いと考えられる。

（4）遺構と遺物各説
第3区においては、SX908以外に遺構は確認できなかった。所期の目的である平安時代以前の遺構については、当該区では認められなかった。
1）SX908（Fig.16, PL.4・5）
福岡城土塁に沿って掘削された長大な塹基である。南北の壁面はほぼ直線に掘削されている。両壁には土止め用の木杭・板材の痕跡が残る。壁面の高さ2.5〜2.6m、深さは北側で3.9m、南側で3.9m。床面には幅約15cm、深さ1cm前の黒い板状物に拡がっており、東面には砂が薄く残っていた。床面直上から銅弾・銅鏡・刀子・銅製ビンセット・ガラス片が出土。旧陸軍二十四連隊が駐屯するにいたる明治後期以降〜昭和期、もしくは戦後間もない時期のものと考えられ、掘削の状況と埋土地が共通していることから、第1竪で検出したSX602と一連のものである可能性が高い。
2）表土層出土遺物（Fig.17, PL.9・10）
龍泉窯系青磁器（95）口徑13.8cm。薄く青緑があった透明釉を全面に施釉する。口縁部外側には白文を、また体部には蓮弁文をへら形に描きしている。
白磁磁（96）高台径7.9cm。薄く青みがあった透明釉を全面施釉後、高台塗付部は僅か取っている。
内部見込には層線をめぐらす。
越州窯系青磁器（97・98）97は高台径8.4cm。軸台は白い瓷形に外側に広がる。内部見込には層線状の弱い線をめぐらしている。口縁が内部見込と高台塗付部に残る。底部には細かな白砂を含む。
釉色は黄緑色で釉上カリはやや悪い。98は高台径8.0cm。上げ底で高台断面は三角形を呈す。体部下半から底部に褐色。内部見込に目詰が残る。釉色は黄灰色から黄緑灰色で、ほとんど削落している。
軒丸瓦（99）瓦状が径約15cm。中房に1〜4の柵子を配している。柵子には単弁を14配し、さらに外縁に同様の柵文を配している。瓦当面は平坦で、文様の形は短く渾圆である。焼きは須恵器質で良く焼きし残っている。色調は灰色。丸瓦表面には柵子目叩き痕が残る。
3）福岡城土塁出土第4〜5層出土遺物（Fig.17, PL.9・10）
龍泉窯系青磁板（100）底部破片である。底部に印絵による草花文を施し、厚手の釉薬をかけていない。外縁は釉薬が不明。
陶器片（101）自然釉が薄くかかる口縁部外側下端はわずかに下方に引き出されている。降ろ日は9条が1個用。胎釉は有英砂を含みやや粗が、堅く焼き残っている。赤褐色。
越州窯系青磁板（102〜104）102は高台径8.0cm。やや上げ底の平台で、内部見込の目詰が残る。胎釉はやや粗く黒色斑が目立つ。103は高台径7.6cm。高台は体方に強く張り出している。胎釉はやや粗く、茶褐色を含む。内部見込に目詰が残る。104は高台径9.0cm。ヘラクレリ出しにより低い高台をを作る。焼きは良好で、釉色は緑色である。内部見込および高台外縁には小さな目詰が残る。
越州窯系青磁板（105）底部径8.4cm。全面に緑色〜緑灰色の釉薬を施釉。釉薬の発色はやや悪い。低い高台塗付部は僅か取っている。内底および底部外縁に目詰を残す。
須恵器板（106）口縁部径23.6cm。内外面ともに横ネタ。口縁部外側には自然釉が薄くかかる。
軒丸瓦（107）瓦状が径約15cm。おそらく単弁を意識した単弁鎮薬文（12角）を配する。外周は欠失。焼きはあまり、もうろ。
軒平瓦（108）均正唐草文を施している。下縁には下向きの陽起陶文を配している。
平瓦（109・110）98は下面に織目叩き痕を、110は柵子目叩き痕を残す。焼きはいずれも良好。
Fig.15 第3区配置図（1/200）
Fig.16 第3区選煤平面および土層断面図（1/100）
Fig.17 第3区出土陶器実測図 (1/3・1/4)
第3章 結語

ここでは、前章の平成9年度調査結果を踏まえ、平成7年度から実施してきた和田台野球場外周南側から東側における福岡城跡土壇下部での遺構のあり方とB群遺構の規格性について検討する。

1. 平成9年度調査のまとめ

第1区では、明治期以降から昭和期の波乱土壇、構築時期が江戸時代以前と考えられる土壇の高まり（SX904）等を確認し、古代から中世の遺物の出土をみたが、江戸時代より古い遺構は認められなかった。また第2・3区では、これまでの調査成果と合わせ、鴻巣館跡周縁の地形復元の手がかりを得られた。

構築時期が、江戸時代初頭以降と考えられる第1区SX904は、断面形が逆台形をなす土壇の高まりである。第3期風化土壇層を含む焼色粘質土（盛土）上面に、基底面幅9m以上、高さ2〜3mほどの規模が想定される。外壁部は近代以降に変化を受けており、明確ではない。江戸時代初頭の城郭縁張を画する小堀、あるいは内堀と端部の構造を考えると、城郭外郭を巡る内堀内壁に沿って、周塀の高まりがあったことになる。これまでの福岡城跡の土壇部分の調査では確認された例はなく、また、福岡城跡図にもこの地点周辺に類似の図示例は存在しないことから、構築時期の上限の問題も含めて、その性格については、周辺調査を持って判断したい。なお、この土壇の高まりは明治期まで存続していたものと思われる。

遺物では、第1区から江戸時代の大名武家生活具の一端を知る上で重要と思われる、18〜19世紀までの波佐見焼、唐津焼、有田焼、現川焼等の陶器系遺物、高取系遺物、瀬戸焼等が出土した。

中世の遺構は確認できなかったが、遺物には宋代の白磁や元代の龙泉窯系青磁が若干出土している。

鴻巣館跡に関しては、外縁東南部コーナーの廃絶後の地形変化の過程を考え手がかりが得られた。

第2区および第3区北側の上層堆積状況と、平成3年〜4年度調査区東側縁辺部における遺構検出面の状況をみると、鴻巣館跡遺構B群の東側（SE300）および基の南北中軸線から東へ約12〜15mほどの地点で、東側に向かって急激に低くなる傾斜変換があり、北側に延びている。また、第3区では、その西側北端部に東から南へに向かって下がり始める傾斜変換点があり、先の傾斜変換の南端を結ぶ、やや不明確であるがコーナーを形成している（図6）。平成4年度調査ではこのコーナーの内側にあたり、検出された遺構はコーナー内側の平坦面（第4区北側の第8層に相当する遺構面）上に分布している。第6層は奈良時代もしくはそれ以前まで遡る盛土である（21〜22層）。なお、この地形変換ライン上に福岡城跡土壇は構築されていることが示され、この傾斜面、およびコーナーの形成時期およびその性格が問題となる。

これについては、①コーナー内側南端部にある平成4年度調査SK3600の遺構面と、本年度第3区第6層（黒褐色粘質土）上面は下部の盛土傾斜をほぼ合致している。②土壇構築にあたって傾斜面を一部削平し、新たな整地層（第3区第4〜5層）上面に土壇盛土が覆っている。③SK3600と第6層には鍔倉時代後期の遺物が含まれているが、近世のものは含まれていないことから、福岡城跡周辺はもはやその前までにすでに傾斜面となっており、その上限は鍔倉時代後期頃以降と推定できる。

この傾斜面が作るコーナーの位置は、平成元年〜2年度調査で確認された南側基部の南北中軸線を基線として、礫石建物SB31を東側へ対象に折り返した地点の東側延長線上と、基壇東西中軸線の東側延長線の交点、すなわち鴻巣館跡周縁に位置する推定基壇北縁の東側延長線上に相当している。したがって、東側斜面と南側斜面が交差し形成するこのコーナーは、平安期の鴻巣館施設の外縁東南部ではなく、おそらく鍔倉期以降福岡城築城までの間に削りだされた人類的な造成によるものと思われる。南側基壇東側から当該区およびその周辺は、かなりの削平を受けていることが考えられる。
2. Ｂ群遺構の平面構成

本年度の第1～3区は、これまでに確認された遺構群の平面構成に何らかの規律性があるかがわ withStyles="font-size:15px; text-align:right;" aria-hidden="true" role="presentation"><span>あるか検討した上で設定した。検討したのは、奈良時代のＢ群遺構と平安時代のC群遺構である。ここでは、全体構成がある程度復元できるB群遺構について、検討結果とその平面構成の試案を提示しておく。なお、検討にあたっては、20分の1実測図で遺構の測座標値を求め、使用尺を1尺＝29.8cmとして算出した。

鴻臈館跡関連遺構群の時期区分

平成4年度までの調査では、平和台野球場外野塀および旧テニスコート部分で検出された遺構群を第Ⅰ期～第Ⅳ期遺構群に分け、第Ⅰ・Ⅱ期を奈良時代とし、Ⅰ期が和棟地業を持つ群と東門およびトイレ遺構など、Ⅱ期が簡立柱建物群に分け、第Ⅲ期・第Ⅳ期を平安時代とし、礫石建物および推定南門基礎、土塙等を含む遺構群とした。その後の切合い関係や方向性
の検討の結果、第I期をB群、第II期をA群、第III期をC群、第IV期をD群とした。先後関係は、それまで最も古いと考えていた第I期遺構群（B群）を第II期遺構群（A群）よりも後出で、第III期（C群）礫石建物群は第I期遺構群の平面規格を踏襲し作られた可能性があると考え、平和台野球場部分の調査における検討課題とした。

B群遺構の平面構成 東門および南の細部構造はTab.4に示したところの数値を測る。北東隅部と北西隅部は未確認であるので、南北距離の測定値は、昭和62年尾に確認されたSA1と平成2年4年度に確認されたSA150間で、東西長については、SA150東西長とSA301とSA302区間である。また北辺長も推定値である。これをもとにした模型平面形は、東西に約75.2m前方、南北に約57m前方の長方形をなす。対応する各辺はわずかではあるが異なる値をとっている。東辺が西辺よりも約1m長い。推定値については将来の調査で補正が可能と思われる。

次に、全体の平面構成の数値上の比列関係を見てみる。

東辺中央に位置する東門の拡間長（間口長）7.31mを東辺長（C1-G1：57.735m）から差し引いた値を、2等分した長さ25.002m（83.9尺）を1単位とすると、北辺および南辺は、その値の值にほぼ等しい。さらに、東北西コーナーを起点として北へ2单陥、西へ1单陥とされた点に昭和62年尾に確認された造状構造SD08で、また東南西コーナーを起点として南へ2単陥に2等分された点に布巻遺構（SX565）が位置している。このようにみると、B群遺構は83.9（＝84）尺を1単位として平面構成が計画されたことがわかり、南北に84尺×6＝533尺（156.94尺）以上、東西に84尺×4＝336尺（100.13尺）以上の平面規模が推定できる。

これらの妥当性については野球場跡地の将来の調査結果を踏まえながら検討してゆきたい。

| 遺構名 | 洗点位置 | 洗点 | 長さ（m） | 説明
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>SA15北辺</td>
<td>北東A</td>
<td>A1</td>
<td>64,861,083</td>
<td>-56,840,190</td>
</tr>
<tr>
<td>SA15北辺</td>
<td>中央B</td>
<td>B1</td>
<td>64,861,083</td>
<td>-56,840,190</td>
</tr>
<tr>
<td>SA15北辺</td>
<td>北東C</td>
<td>C1</td>
<td>64,861,090</td>
<td>-56,766,010</td>
</tr>
<tr>
<td>SA302東辺北</td>
<td>北東C</td>
<td>D1</td>
<td>64,789,069</td>
<td>-56,765,199</td>
</tr>
<tr>
<td>SA302東辺北</td>
<td>中央</td>
<td>E1</td>
<td>64,789,055</td>
<td>-56,765,755</td>
</tr>
<tr>
<td>SA302東辺北</td>
<td>南辺中央</td>
<td>F1</td>
<td>64,786,203</td>
<td>-56,764,303</td>
</tr>
<tr>
<td>SA301東辺南</td>
<td>南東A</td>
<td>G1</td>
<td>64,757,385</td>
<td>-56,766,101</td>
</tr>
<tr>
<td>SA150南辺</td>
<td>中央</td>
<td>H1</td>
<td>64,757,385</td>
<td>-56,803,735</td>
</tr>
<tr>
<td>SA150南辺</td>
<td>南辺I</td>
<td>J1</td>
<td>64,757,385</td>
<td>-56,841,608</td>
</tr>
<tr>
<td>SA303西辺</td>
<td>中央</td>
<td>J1</td>
<td>64,787,390</td>
<td>-56,840,275</td>
</tr>
<tr>
<td>SA303西辺</td>
<td>西辺</td>
<td>J1</td>
<td>64,787,390</td>
<td>-56,838,605</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* A〜Jのアルファベットの番号は1か遺構外縁を2が推定柱芯を3遺構内縁を表す(Fig.19)。
図版

(PLATES)
(1) 第1区調査前現況（南から）

(2) 第1区調査終了後全景（南から）

(3) 第1区調査終了後全景（西から）
(1) 第1区SD901検出状況（東から）
(2) 第1区SX904およびSD901検出状況（南から）
(3) 第1区SD901検出状況（南西から）
(4) 第1区SX904検出状況（南から）
(5) 第1区SX904土断面（南西から）
(1) 第2区調査前現況（南から）
(2) 第2区調査終了後全景（南から）
(3) 第2区北側トレンチ掘削状況（北から）
(4) 第2区作業風景（南から）
(1) 第3区調査前現況
（北西から）
(2) 第3区調査終了後全景
（南から）
(3) 第3区掘り下げ状況
（南東から）
(4) 第3区北側壁土層断面
（南から）
(5) 第3区南側赤褐色粘質土
土面
SX908検出状況（南から）
(1) 第3区西壁、Sx908土層堆積状況（南東から）

(2) 第3区Sx908検出状況（東から）

(3) 第3区Sx908内作業風景（南から）
第1区出土遺物 1 (1/3)
第 1 区出土遺物 2 (1/3)
第1·2区出土遺物（1/3）
鴻臚館跡 9
－平成9年度発掘調査概要報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第586集

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目 8 ー 1
平成10年3月31日

印刷 大成印刷株式会社
福岡市博多区博多向陽三丁目6番32号
KOROKAN

9

Excavation and Studies of
Korokan Ruins
in Fukuoka

March 1998
THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN